演習・ゼミ形式授業における聴覚活用を主とする学生への補聴援助システムの活用例

○香川龍仁、中津真美、松下眞弓、波多野比美子、切原賢治（東京大学バリアフリー推進オフィス）

Ⅰ　はじめに

本学では、人工内耳ユーザーの学生や補聴器を装用する軽度・中等度難聴学生など、聴覚活用を主とする学生の支援ニーズが増加している。授業教員の音声聴取が困難な場合は、概して補聴援助システムを利用する。主な話し手が教員1名のような講義形式の授業では、補聴援助システムのマイクを教員に装着すれば、聴覚障害学生は教員の音声を概ね聴取できる。

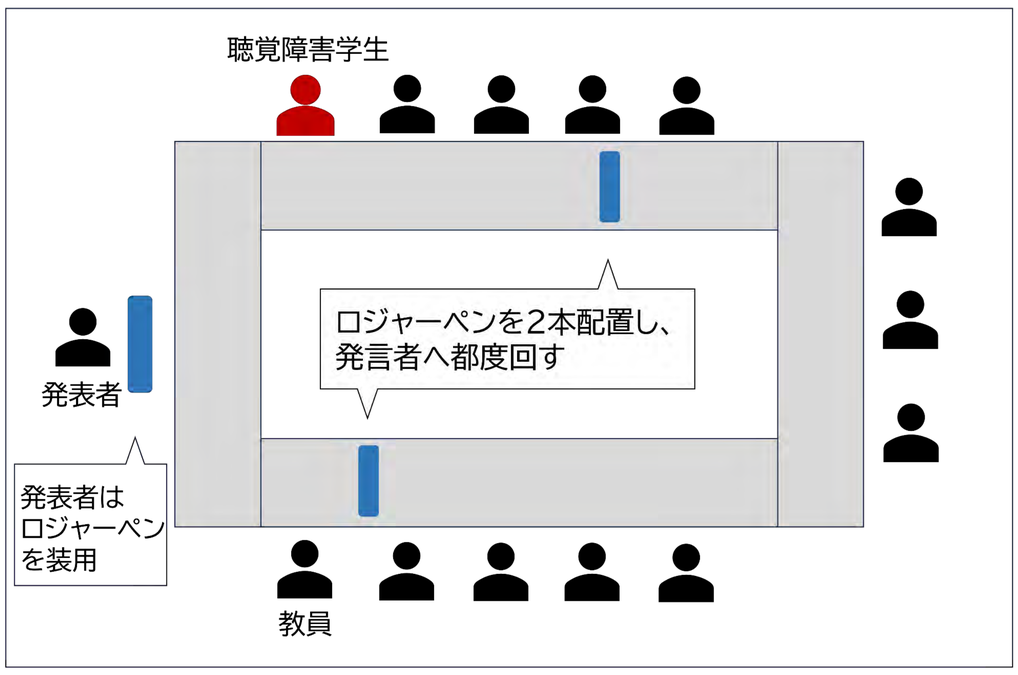
一方で、発言者が固定されない演習・ゼミ形式の授業では、補聴援助システムのマイクを発言者へ回しきれずに聞き取りに困難が生じる。また、発言者へ都度マイクを回す方法は、活発に交わされる議論の流れを遮ることにも繋がりかねず、聴覚障害学生自身がためらいを感じる場合もある。そのため本学では、複数の補聴援助システム（デジタルワイヤレス補聴援助システム ロジャー*）を参加者の着席位置に応じて適切に配置し、議論の自然な流れを遮ることなく音声を聴覚障害学生へ届ける方法を検討してきた。本発表では、演習・ゼミ形式での補聴援助システムによる支援について、本学にて蓄積された実践例を報告する。

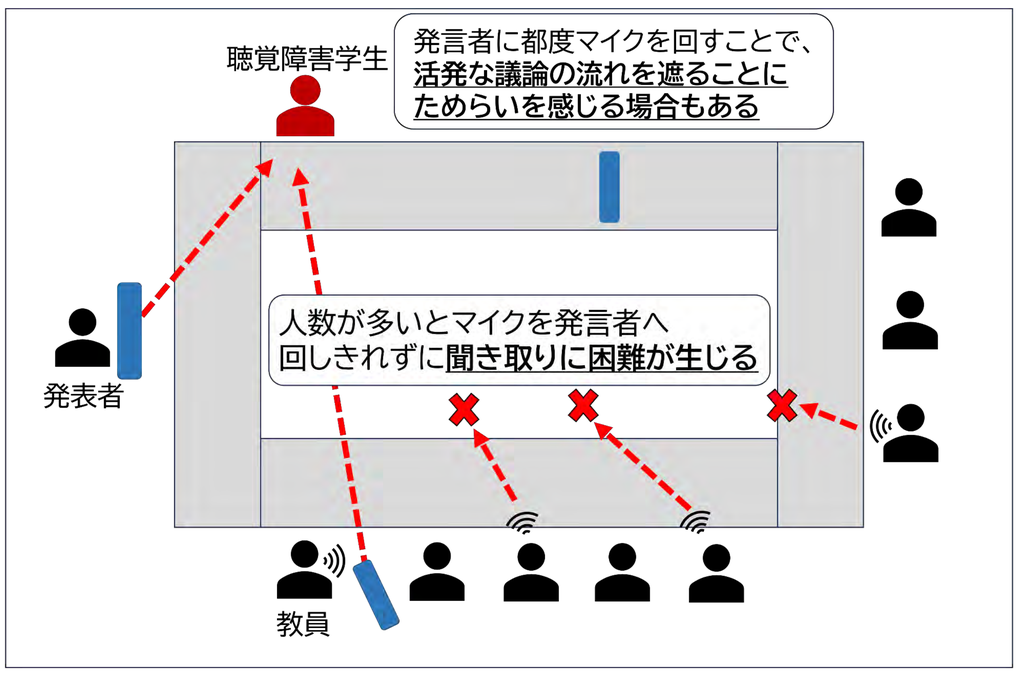
＊デジタルワイヤレス補聴援助システム ロジャー　:https://www.phonak.com/

Ⅱ　実践事例

車座で着席して行う演習・ゼミ形式授業での補聴援助システムの活用例

1. 実践事例1 :ロジャーペンを3本のみ使用した、初期の頃の試行　　:ロジャーペン



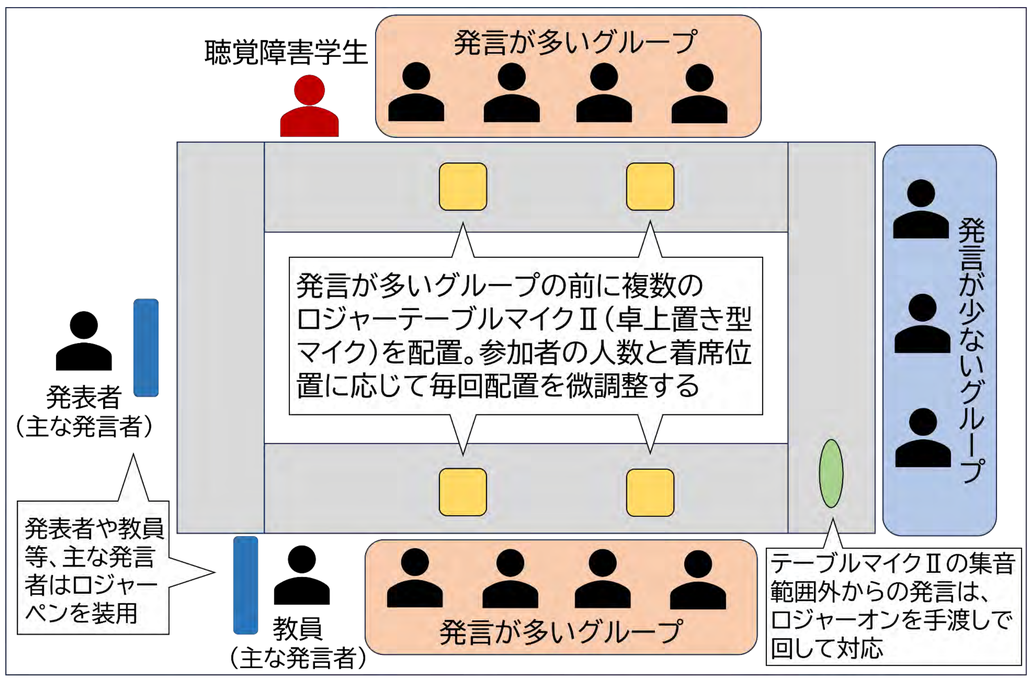


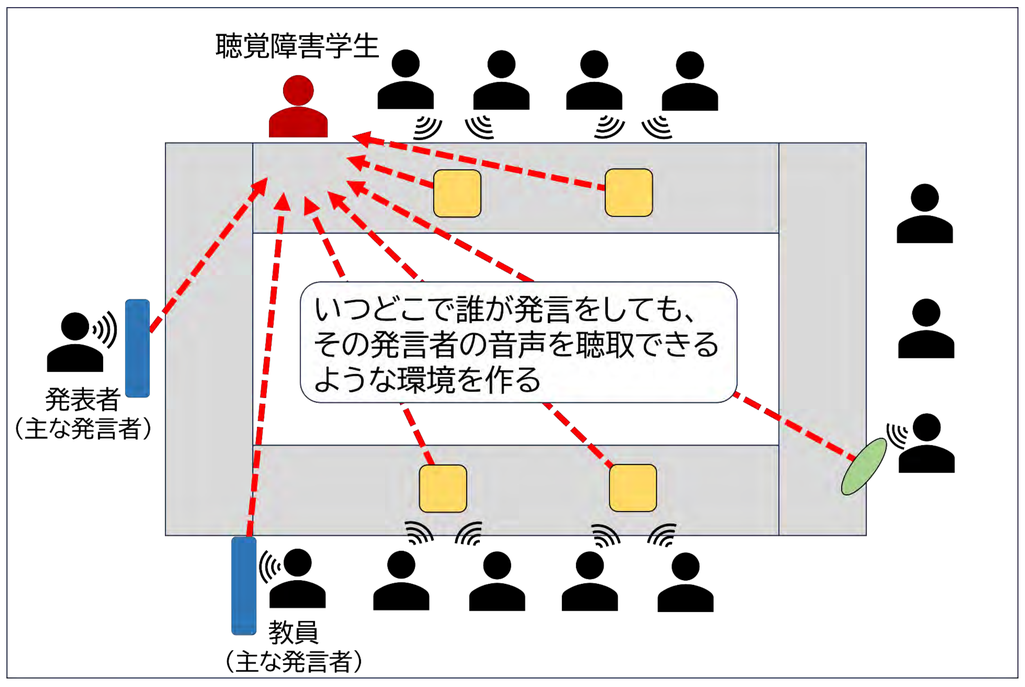
-発表者はロジャーペンを装用する。
-その他にロジャーペン2本を机の上に配置し、発言者は都度ロジャーペンを手に取り発言をする。

-発言者へのマイクの受け渡しが追いつかない場合がある。
-都度マイクを回すことで活発な議論の流れを遮ってしまい、聴覚障害学生が他の学生に対してマイク使用の依頼することにためらいを感じる場合もある。
→聞き取りに困難が生じる

2. 実践事例2 :ロジャーを複数台使用して配置を工夫し、可能な限りマイクを手渡しする過程を排除した事例

:ロジャーペン　:ロジャーテーブルマイクⅡ（卓上置き型マイク）　:ロジャーオン





-教員や発表者等の主な発言者にロジャーペンを装用する。
-発言が多いグループの前にロジャーテーブルマイクⅡを複数配置。
　→配置位置は数度の検証を重ね確定。当日の参加者と人数に応じて適宜微調整を行う。
-テーブルマイクⅡの集音範囲外からの発言に備えて、発言者へ手渡しできるようにロジャーオンを1台確保する。

-発言者へマイクを回す過程を可能な限り排除し、議論の流れをできるだけ遮らないような環境を作る。
-いつどこで誰が発言をしても、聴覚障害学生がその発言者の音声を聴取できるような環境を作る。
　→聴覚障害学生の聞き取りが改善

Ⅲ　まとめと今後の課題

演習・ゼミ形式での補聴援助システムによる支援については、デジタルワイヤレス補聴援助システム ロジャーの送信機を複数台用意し、主な発言者にロジャーペンを装用、発言の多いグループの前に卓上型のテーブルマイクⅡを配置、発言が少なくテーブルマイクⅡの集音範囲外に着席する学生には手渡しで送信機を回すよう依頼して対応した。発言者へ送信機を回す過程を可能な限り排除し、教室内にいる参加者全員の音声を聴取できるよう配置を工夫することで、演習・ゼミ形式授業における聴覚障害学生の聞き取りが改善された。

その一方で、扱う機器の数が増えることで充電やマイク配置等といった準備に時間を要し、聴覚障害学生自身の負担が大きくなるという課題もあり、今後さらなる検討が求められる。

UTokyo IncluDE 東京大学多様性包摂共創センター バリアフリー推進オフィス
メールアドレス　spds-staff.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp　　バリアフリー推進オフィスURL　http://ds.adm.u-tokyo.ac.jp/